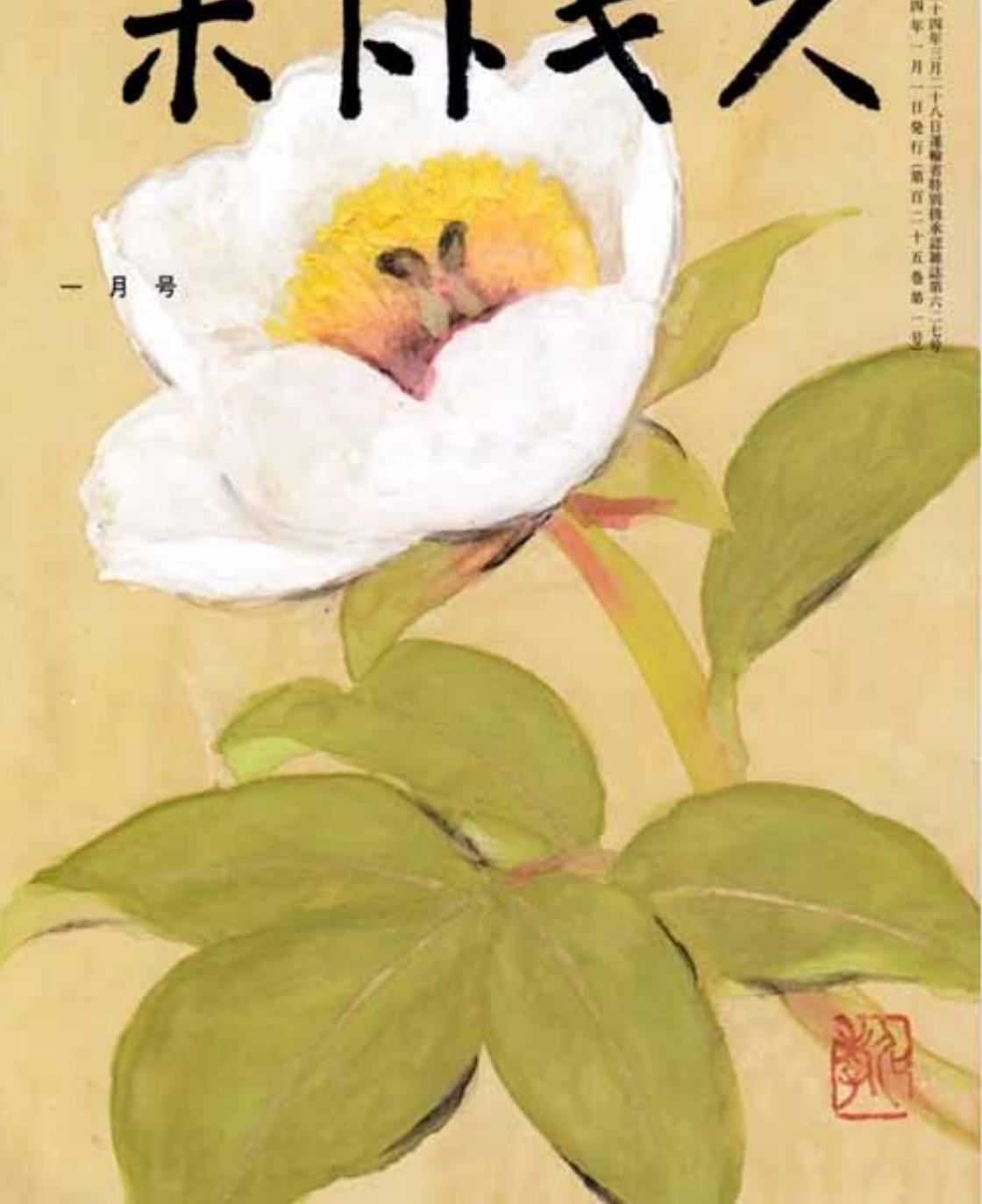


ホトトギス

昭和十四年三月二十八日運輸省特許局特許第六二七号
令和四年一月一日発行（第百二十五巻第一号）

ホトトギス

一月号



風雅の小筥（四十八）

廣太郎

このコーナーも今回で「四十八」となった。ページを開いて直ぐの場所であるので皆様の反響も色々あるようだ。そんな中、雑詠の裏の通信欄に内容についてのリクエストを頂いた。

「ホトトギス社の由来等 “風雅の小筥” でも取り上げていただけたいと思います」

というものであった。考えてみると現在ホトトギス社が、東京都千代田区神田駿河台という場所に事務所を構える迄には、松山から東京都内を転々としているのは御存知の通りであるが、具体的にどのような変遷があったかは興味を持たれる方が居られるのは当然であろう。拙い私の調べ方ではあるが、ざっとエピソードも交えて申し上げたいと思う。

明治三十年一月に創刊されたホトトギスの発行所は愛媛県松山市大字立花町五十番戸という住所であったという記録である。以下当時の住所表示であるので現在とは違っているだろう。この場所では一号が二十号迄発行される。一月号から、翌年の八月号迄という事になる。そして、松山での経営が行き詰ったという事も有名な話であるが、明治三十一年十月号から虚子の手で東京から発行される事になる。お気付きだと思うが、明治三十一年九月号というのは発行されていない事になる。そして東京に移転した最初の住所が東京市神田区錦町一―十二。現在でも神田錦町という地名はあるが、図らずも現在のホトトギス社の事務所から結構近い場所なのである。という事でこの話は次回へと続く。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年一月五日 カトリック新聞選者吟

聖櫃の赤き寒灯てふ孤高

一月六日 NHK文化センター

黒々と初富士車窓埋めゆく
寒鴉声の乾いてゆく朝
松納都心は動き止めたまま
悴める手で鍵穴といふ至難
寒灯下音潤みゆくノクターン

一月七日 蕉心会

吟行地探しさまよふ冬日向
悴みて休園の札読む朝
山茶花の一片水の黙を解く
都鳥羽に抱かるる一行詩
寒雀丸々と鳩そはそはと
都鳥脚伸び切つてゐる飛翔
都鳥積る話がありさうな

一月八日 「俳句四季」出句

落葉踏む都心の音色奏でつつ
寒雀一オクタール上げて鳴く
万両の色を仕上げて風去りぬ

一月九日 菅屋ホトギス会

エンジンをかけ初旅の昂りに
丑年の丑紅買うて寿
水面鏡卒寿の齡隠せざる

漆黒の富士初旅の車窓かな

一月十日 野分会菅屋例会

君の頬染め上げてゐる雪見酒
冬薔薇千本といふ恋心
一片を天に還して冬薔薇

一月十四日 土筆会不在投句

富士を見てより恵方道開けゆく

一月十四日 北國文芸選者吟

初場所や隅田の風に囃されて

一月十五日 廣邦会

六甲の稜線丸く淑氣満つ
指揮棒の先より生るる淑気かな
鬼やらひ鶯張りを踏み鳴らし

一月二十日 「天地」新年の集い不在投句

初富士の白を拒んでゐる車窓
初電話差の母を憂ふ妹
初芝居現世遠くしてをりぬ

一月二十四日 野分会東京例会リモート句会

冬薔薇一片零れ詩を紡ぐ

一月二十四日 青風会東京例会不在投句

万両に狹庭色付き初めにけり
凍蝶の足の先なる生気かな
気紛れな天気続きて日脚伸ぶ
都会には都会の顔や雪女
寒牡丹散りて未来の動き出す

一月二十六日 若水句会不在投句

嫁が君猫の視線の外に居り

弾初やシヨパンラフマニノフリスト

若菜摘指に香りを移しつつ

一月二十七日 目黒学園句会

寒の水含み故郷嘯み締める
東雲の仄と色づく春隣
春隣水は硬さを解きつつ

雑詠 廣太郎 選

蜻蛉飛び初めて昭和に戻る町 京都 山崎貴子
 蜻蛉飛ぶための芝生と虚空あり 同
 始まらぬ神事や蜻蛉飛ぶばかり 同
 人惚ぶ時とは銀河仰ぐ時 袋井 湖東紀子
 父と兄在す銀河と仰ぎみる 同
 冷々と盆提灯の点りたる 同
 約束のしるしげんまん花野道 神戸 和田華凜
 秋簾内緒話の京ことば 同
 鶏頭花絵筆の先の燃えてをり 同
 鳴きだしてよりの静けさ鉦叩 龍ヶ崎 今橋眞理子
 洗ひたる硯に机辺かたづけ 同
 句に支へられし歳月癩祭忌 同
 かなぶんの怒りの飛んで来りけり 熊本 岩岡中正
 人の世のかくも静かに帚草 同
 一族のあとかたもなき帚草 同
 暮れ色の机に向かふ文月かな 神戸 山田佳乃
 重ね置く紙の湿りや夕かなかな 同
 小包のおほかた占める南瓜かな 同

文月の夜を硯海に沈めけり 同 涌羅由美
 旅靴よりはみ出しぬ踊笠 同
 踊の灯消え戻りくる星の綺羅 同
 見合ひしてボートに乗つてもう会はず 渋川 木暮陶句郎
 むささびの飛んでみどりの夜をつなぐ 同
 青葉冷抱卵の鳥眼をつむり 同
 葡萄の香食べしあとからしてをりぬ 八尾 山下美典
 穏やかに流灯視野を去つてゆく 同
 旧盆の墓地より駅に始まりぬ 同
 初雪の富士にみづうみ静もれり 神戸 藤井啓子
 鍵のなき十戸の里の良夜かな 同
 枝豆はうまし話はつまらなく 同
 遠き日は遠き日のまま月見草 東京 今井千鶴子
 残りたる吾に燃えぬる門火かな 同
 月渡りゆくを思ひて眠りける 同
 棚を解くごとく晩夏の橋渡る 香川 湯川 雅
 聞きとめて鯛だけに耳を貸す 同
 灯下親し少し正しぬ手暗がり 同
 梅雨明けにけり天地に呱呱の声 相模原 木村享史
 甚平がもう普段着の老である 同
 籐椅子に虚子の句日記いつもあり 同
 幹に蛇棲むてふ楯の大樹かな 長岡 安原 葉
 虚子句碑に惚ぶ面影秋涼し 同
 秋暑し雨もほつほつ帰らねば 同

雑詠句評（十二月号より）

なつかしや虚子の字の門露涼し 長岡 安原 葉

米寿翁涼しき顔でまだ生きて 相模原 木村享史

「虚子の字の門」とは、「○○庵」、「○○居」とか、虚子の書いた字の表札か扁額のかかげられた門であろう。つまり、この家は虚子と関りのある家ということが分かる。今回、訪ねてみて、あらためてその字を見るにつけ、その家での出来ごとや、虚子その人がなつかしく思い出されたのである。季題の「露涼し」からは、訪い得た、その時のすっきりした気分が伝わってくる。（公次）

虚子の字で書かれた門というのは鎌倉の御成小学校の校門が有名であり、筆者も何度か前を通りかかった時に見たり、一度学校の中で原本を拝見させて頂いた事もある。作者にとつては久しぶりにこの学校を訪れたのだろう。直接教えを受けた高弟としての喜びが季題を通して伝わってくる。（廣太郎）

米寿翁は作者ご自身のことと拝察する。今の世、八十八歳は珍しくなくなつた。作者には覆籙という言葉がそのまま当てはまるのである。涼しき顔とは、日常を何気なく熟して来られた温顔そのものである。「まだ生きて」などと凶々しいような方をされて居られるが、そんなことはない。俳句界のために「まだまだ」お力を貸して頂きたいものである。（さい雪）

ホトトギスの投句者で、百歳以上は何名おられるだろう。ホトトギスに限らず日本や世界には百歳を超えても元気に暮らしておられる方は多くおられるとニュース等で話題になる事も多い。作者は米寿という事で八十八歳を迎えられた。何とも明るい表現であり、季題がこの上もなく効いている。（廣太郎）

天地有情

い子選

何一つ妻の遺品は黴びさせず
 人老いてゆく藤椅子に掛けるたび
 朝風に散る一片の牡丹かな
 黴の香もまたなつかしき峰の寺
 はだれ野に砲声響き富士孤高
 春めいて森の饒舌木の寡黙
 夫婦箸いつかちぐはぐ秋深し
 冷やかに治療薬なく横たはる
 残暑早や波がさらつて行きにけり
 新涼や朝茶濃くして一と息す
 八千草の遊ぶ背山に妹山に
 詩心は旅心かと月の秋
 ランドセル身に添ひそめし九月かな
 今生の別れと秋蟬鳴きつのる
 爽やかに笑ひ合ひたる昔あり
 後ずさりしつつ門火を見る小犬
 払つても払つても梅雨はれぬ空
 きつぱりと心の黴を払ひけり

相模原 木村享史
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 鎌倉 星野 椿
 同 同
 神戸 和田華凜
 同 同
 東京 高濱朋子
 同 同
 今井千鶴子
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同

爽やかに今朝も目覚めしことの幸
 天の川仰ぎて星座結びみる
 垣根より焚火の匂ひのぞき込む
 浪の花波に押されて風に乗る
 送火や残り香に門鎖し迷ふ
 鯛や背山へ向けて開く窓
 一筋の風のソリスト法師蟬
 独唱の果の沈黙法師蟬
 硯洗ふ老の手習なかなかに
 門灯を霧に点せる別墅かな
 鯛のとんと聞かざる都市暮し
 残暑なる空憎しげに青きかな
 水にふれ精霊とんぼ影を曳く
 暑に耐ふる鴉はくくみ人は黙
 秋めくや良医良薬頼みます
 厄日過ぐ凶器に似たるウイルス禍
 廃ビルのくすみを流し秋時雨
 何時までも母は母なり梨を剥く

龍ヶ崎 今橋真理子
 同 同
 東京 今井肖子
 同 同
 香川 湯川 雅
 同 同
 奈良 古賀しぐれ
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 同 河野昭彦
 同 同
 仙台 赤川誓城
 同 同
 神戸 浜崎素粒子
 同 同
 大阪 酒井湧水
 同 同